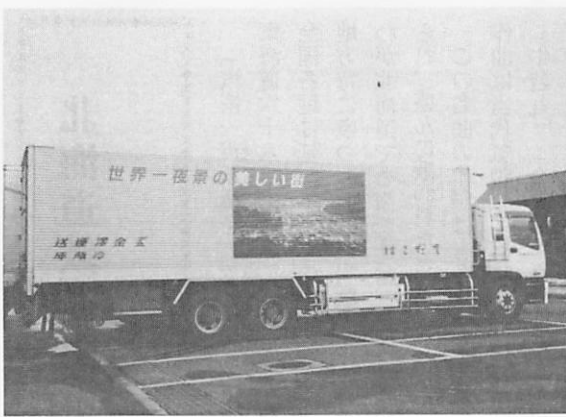


### 函館観光の現状

拓銀倒産等による北海道経済の落ち込みは全国最低の状態にあると言われている。函館もその例外ではない。しかし函館圏の最大の産業ともいえるべき「観光」は根強い人気を維持している。

平成十年四月から九月迄の、上半期の観光客の入れ込み数は、約三百八十四万



トラックに描いたポスター

さらに平成十年度から新たな宣伝手段として、函館市内の運送会社の協力を得て全国を走るトラックのコンテナの部分に縦一・八米、横三米の函館の夜景のシールを貼り、走る観光ポスターとして、

四千人で、平成九年に比べて、約四千人〇・七%増えている。下半期もこのままのペースでゆくと、過去最高であった平成九年度を上回る入れ込み数になることが期待されている。

その要因としては、函館を結ぶ国内の航空路線が拡大したことや、旅行者が安い料金で遠くへ、さらに短い日程で、旅行回数を増やす傾向にあることなどが挙げられる。すなわち週末に一泊二日程度の予定で、気軽に出かける時代になり、観光、温泉、グルメの揃っている函館はいまや人気の観光地になってきた。

この他、テレビや映画、新聞や雑誌等で函館がたびたびと取り上げられる機会が多いことも、プラスに影響しているものと思われる。

十一月二十四日にスタートした。(写真に期待されている。道南会の皆さんもご参照)このトラックは首都圏を中心に遠くは九州まで行くので、その効果は大いに期待されている。道南会の皆さんもこのトラックを見かけたら、熱いエールを送って頂きたい。

### 「五稜郭ゆかりのまち協定」締結

わが国で二つしかない、歴史的遺産の星形の城「五稜郭」を持つ函館市と長野県白田町とは、昭和五十年から各種の交流が行なわれて来た。特に平成九年七月函館市で「世界星形城郭サミット」が開かれ、世界各国の星形城郭を持つ都市のほかに国内から白田町が参加した。

これを契機に更に交流を深めようという気運が高まり、両地域の相互理解と友

好を促進し、活力ある「まちづくり」をめざして、文化・教育・スポーツなどの分野で交流を広げるため「五稜郭ゆかりのまち協定書」が締結された。調印式は十月十六日に白田町で行なわれ十七日に祝賀会が開かれた。今後は自治体間だけではなく、市民の間の交流を広げ、二十一世紀に向けて函館市と白田町がともに発展することが期待される。

白田町の五稜郭は慶応三年(一八七一年)龍岡藩主の松平乗謨の時に完成、廃藩とともに地所と石垣以外は取壊され、現在は小学校用地に利用されている他、僅かに残っていた御台所が解体復元され資料館として保存されている。

白田町は人口一五八九四人で、農村医療で有名な「佐久総合病院」の所在地で「健康と福祉の町」として発展し、また東洋一のパラボラアンテナを誇る「白田町宇宙空間観測所」のある「星のまち」としても有名である。



長野県白田町五稜郭

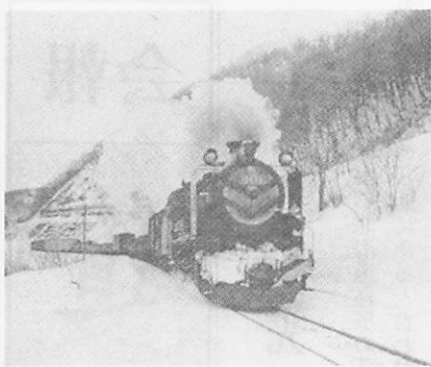
# 北海道鉄道唱歌・南の巻

弦巻 鋼男

「汽笛一声新橋を」で始まる鉄道唱歌  
東海道六十六番に続いて、鉄道の路線が  
全国各地に延びて行くのに合わせて、各  
地方毎に幾つもの鉄道唱歌が生まれた。  
わが北海道でも南二十番、北二十番が作  
られ、盛んに歌われたという。

この名曲の作詞は有名な大和田建樹、  
作曲は当代気鋭の多梅稚と「一寸法師」  
「牛若丸」「金太郎」を作曲した田村虎  
藏との合作であった。

北海道鉄道唱歌が盛んに歌われた頃に  
道南の漁師達が、豊漁だった鯨がゴトン  
ゴトンという汽車の音が嫌いで北に逃げ  
たという一口噺も残っていた。



雪中を往く9600形機関車

一  
千里の林万里の野  
四面は海に囲まれて  
わが帝国の無尽庫と  
世に名ざさるる北海道

二  
四月に雪の消えしより  
夏まで春の花さきて  
わが帝国の楽園と  
人と呼ばれるる北海道

三(函館)  
いざ一めぐり見て来んと  
津軽海峡峡にして  
巴の形に漕ぎ入れば  
ここぞ渡島の函館港

四(函館)  
出船入舟ひまもなく  
商業貿易北海の  
関門占めたる土地ぞとは  
知らるる市街の賑しさ

五(桔梗)  
是より乗り込む汽車の窓  
見かへる臥牛の山消えて  
緑ははてなき牧場も  
秋は桔梗の花さかり

六(七飯)  
人參植えて杉植えて  
百年ちかくの昔より  
開墾せられし七飯村  
農産よそには勝れたり

七(江差・岩内)  
馬車の便ある本郷の  
十四里西に江差あり  
岩内寿都と諸共に  
北海屈指の良き港

八(大沼)  
トンネル出でてながむれば  
周回八里の大沼に  
裳裾をかけて聳え立つ  
渡島の富士も面白や

九(森・有珠)  
森にいづれば旅人の  
眠気もさむる噴火湾  
晴れたる日には薄青く  
有珠の高嶺も仄みえて

一〇(八雲・国縫)  
海辺つたひに早いつか  
過ぐる胆振の国境  
八雲に続く国縫は  
満俺鉦山所在の地

一一(長万部・黒松内)  
鰯鱈に法貴貝  
海産おほき長万部  
南部陣屋の跡すぎて  
はや後志の黒松内

一二  
尻別川の水の声  
聞きつつ上る岸づたひ  
岩おもしろく山深く  
若葉紅葉のながめあり

一三(比羅夫)  
紅葉の如き赤心を  
桜の如く香らせし  
阿部の比羅夫の忠勇を  
紀念に残す比羅夫駅

一四(羊蹄山)  
仰ぐ雲間に雪しろく  
つもるは蝦夷富士羊蹄山  
登れ人人陸奥湾も  
一目に見ゆる高嶺まで

一五(倶知安)  
裾野は倶知安の大原野  
オノコ楡松檜桂  
林は天を打ち掩ひ  
面積ほとんど三十里

一六  
ここを開きて耕して  
作りし村は年年に  
栄えて朝夕立ちまざる  
煙あまねく民ゆたか

一七  
されど秋すぎ冬の来て  
北風雪を吹く時は  
汽車ゆく道さへ埋もれて  
寒さに泣くは此附近

一八(然別・余市)  
鉦山名たかき然別  
林檎の実のる余市村  
夕風さむく秋ふけて  
紅ならぬ枝もなし

一九(蘭島・塩谷)  
蘭島・塩谷の海辺には  
楽しき海士の里見えて  
鯨あみ引く春の日の  
賑言葉につくされず

二〇(小樽)  
土地の話を目に聞き  
かはる景色を目に見つつ  
慰む程に呼ぶ声を  
聞けば小樽か早こは

# 特集 同窓会

道南会の会員は函館を中心とする道南地方の出身者と、道南にご縁の深い人々で占められている。そして会員同志を結びつけている一つの大きな要素は、同じ町内に育ち、同じ小学校に通った少年少女期の共通の思い出である。

この所、函館の一部の地区の過疎化

による小学校の統廃合が進められるにつれて、東京での同窓会活動が盛んになって来ている。そこで共通の思い出の源泉ともいえる、小学校、中学、高校の首都圏での同窓会活動の現状を特集して見た。今回は間に合わなかった同窓会については次号以降に継続して掲載したい。

## 東京幸小学校同窓会

我が母校の幸小学校は、明治十六年に開校、昭和四十五年に閉校するまでの間に一万五千人余の卒業生を世に送り出しました。しかし西部地区の過疎による学童数の極度の減少から、隣校の常盤小学校と共に西小学校に統合され廃校となりました。

たまたま昭和五十八年九月、母校創立百周年記念式典が函館で開催された際に配布された「卒業生寄付協賛者名簿」を手掛かりに、関東在住者の同窓会を作ろうという声が高まりました。昭和六十年九月に銀座松屋デパート内の精養軒で、第一回東京幸小学校同窓会（略称東京幸会）が誕生しました。第三回以降は飯田橋大神宮会館マツヤサロンに会場を移して年一回の総会と親睦会を開いてお

ります。

東京幸会は卒業生相互の親睦を目的と



幸校同窓会 於 大神宮会館

した「集い」として運営してゆきたいと会員の意向で、会則は定めず会長も置かず、会の運営は幹事が行なっています。

会員も関東地区だけでなく、遠くは長崎、神戸、大阪、名古屋、更には羅臼、札幌からも総会に馳せ参じて呉れたことも度々ありました。また隣校の常盤、弥生の卒業生も特別参加で出席頂いております。参加者は回を重ねる毎に増え、最近五十名内外となっております。因に平成十年の総会時の会員総数は百三十名でした。

「幸坂は向上の針路を不ず山の口……」

と、校歌を斉唱しながら、小学生時代の数々の思い出を、先輩後輩、男女の分け隔てなく語り合い、更に友情を深め「生涯、忘れられない思い出になりました！」という感謝を籠めた手紙を出席者から頂くことが度々あります。僅か三時間では到底満足できない出席者の約半数は、総会のあと二次会に足を運ぶのが毎回の習わしになっています。

幸会では定期的に機関誌を発行してはいますが、総会案内の返信に記された会員の近況などを総会の資料に載せて配布しています。この他、会員有志や特別参加された常盤、弥生の卒業生に依頼して母校や友人のこと、西部地区で育った思い出を綴った作品を総会終了後、全会員に送る報告書に載せて、参加者は勿論欠席者に当日の雰囲気などをレビューし

ながら味わって貰い、次回出席への意欲を醸成すべく、レポート風に書き綴って送付しております。

東京幸会も今年創立十五周年の節目になりますので、記念小冊子の発行を企画し、目下その準備中であります。

歴代の主な幹事は第一回から八回まで山本兼三郎他七名、九回〜十二回は東康司他七名、十三回以降は山本兼三郎他三名です。  
(山本兼三郎 記)

## 東京弥生会

東京弥生会は昭和四十九年十月に発足して四半世紀たった。創立者である道南会の元会長の和田貞一さんが初代会長で亡くなるまで会のため尽力された。会員は約百名で、年一回十月に総会を開き、母校校長や同窓会長を招いている。会場は三越日本橋店の七階特別食堂で、長年に亘って行なわれている。

昨年は十月二十三日に開催し、函館の母校から藤井昭夫校長先生にご出席を頂き、三十名の会員が出席し、和田さんを偲びながらふるさと函館の思い出を語りあった。

現在、西原林之助、石田重雄、川守田孝平、坂本保子、伊賀嘉樹が幹事として会の運営に当たっている。

(川守田孝平 記)

# 「東京常盤会」と

## 「常盤の思い出」

首都圏には常盤小学校の卒業生が約二百名在住しており、この中の有志が集まり「東京常盤会」を作っている。同窓会の東京支部のようなものである。この会は昭和四十九年に十二名で発足し、六十年に規約や役員を決め、名簿を作り組織的に運営している。年一回、六月に会合を開いているが、三、四十人の人が集まる。現在二十二回の石田端さんが会長、二十三日の胡麻鶴さんが幹事長として、お世話をしており、私は全体の同窓会長をしている。

今から二十八年前の昭和四十五年に廃校になった母校、函館市立常盤小学校は平成元年の同窓会復活から十年を記念して、文集「常盤の思い出」B5版百五十五頁を作成した。この文集には同窓生の回想記のほか、当時の写真や学校通信などを掲載し、学び舎の懐かしい思い出が詰まった内容になっている。

常盤小学校は幸小学校と共に、新設の函館市立西小学校に統合されたが、卒業生は大正十二年の第一回生から四十八回生まで約七千人に上っている。この文集は第八回生の私が三年前から寄稿を呼掛け、二十六回生の上田周之助君の協力を得て作成したものである。

文集の前半は、同窓生や旧職員ら延べ四十二人が約六十頁にわたって先生や行事の思い出を綴っており、後半は学校の沿革、卒業生のクラス別氏名、校長始め在職教職員全員の氏名が掲載されていてまさに常盤校の自分史ともいえるべきものとなっている。

私はこの文集を通じて、常盤の卒業生が同窓生であることの誇りを持って会員同志の交流を深めて貰いたいと願っている。

文集は平成十年十月九日、湯の川で開かれた十周年記念同窓会で配ったが、希望者には実費二千五百円で頒布している。

(室谷邦雄 記)

## 宝小学校同窓会

## 東京支部

宝小学校の東京支部の発足は、昭和五十四年九月、本部事務局長を務める畏友伊藤 博君からの呼び掛けに始まる。実はその一年前、昭和九年の大火で消失し廃校になった母校を偲んで「宝小学校創立百周年記念祭」が、伊藤君を中心とする有志によって企画されていた。そして五十二年十一月十二日、今はその名も懐かしい函館駅前の拓銀ホールに、四百人の同窓生を集めて盛大なイベントが開催され、それを契機として各地のOBを糾合しようとの動きが広がった。

まずは札幌と東京に支部を作ってほしいとの本部の強い要望がもたらされた。取りあえずの世話役を依頼された私は、道南会で顔馴染みの宮本武雄氏や福田次助氏と相談の上、支部長に東出三郎先輩副支部長に宮本さん、会計に福田さんをお願いし、私が事務局長を引き受けることで伊藤君にも喜んでもらった経緯がある。しかし、実際に支部活動を行なったのは五十七年に入ってからのこと。何回か熱心な仲間と世話人会を開き、いよいよ十月十日、有楽町のニュートーキョー九階の中華店で創立総会を持つことになった。幸い案内状を送った百五十人のうち七十人の出席があり、会則も決まり、

新役員は次のように決まった。顧問 梁川剛一、秋山 敏、支部長 東出三郎、副支部長 一星孝一、宮本武雄、常任幹事 黒丸正吉、森 光夫、堀井栄一、藤井利夫、能味寿哉(事務局)、会計 福田次助、監査 佐藤清治。

この日は函館から四倉太郎会長、藤谷きみ、奥田正一、伊藤 博の四方、札幌からは佐味タイさんも上京して下さって皆さんの感動を誘った。

その後の開催状況は、毎年一回(始めは十月十日、平成以降は七月七日頃)大会をニュートーキョーで行なうが、役員会は鳥井坂会館で年三回位、打合せ会をもっている。現在の役員は顧問 東出三郎、西堀正弘、黒丸正吉、福田次助、支部長 山本長太郎、副支部長 田脇由夫、能味寿哉(事務局)、常任幹事 佐藤嘉男、神永正治郎、宮川育郎、小林宗一、塚田政二、今岡 貴、服部ソノ、会計 梅崎総一、監査 井筒吉彦。

機関誌(会報)は年一回大会開催時に配布し、すでに第十四号を数える。発行部数は百部で内容もバラエティに富んでいるが、伊藤博君のライフワークともいえる個人新聞「模本通信」から色々なネタ

(次頁下段へ続く)



常盤校記念碑

# 青柳会

昭和五十四年の道南会新年総会で、故和田貞一會長の「弥生小学校の同窓会を盛大にやっている」とのお話にヒントを得た現幹事の板垣寿見子さんが、母校に照会して創立百周年の名簿を入手、首都圏に住む同窓生に電話で確認する一方、同窓の武富紀夫・久保雄三氏らの応援を得て同窓会開催にこぎつけた。

第一回は昭和五十五年四月十九日に、新宿野村ビル「ホテルオークラ・トップハット」に四十人が参加して盛大に行なわれた。会場は毎回、母校に在籍されたホテルオークラ取締役の橋本保雄氏のお世話になっている。

平成九年の第七回総会で「会則」を決め「青柳会」として新発足し、役員には會長二上達也、幹事長三國比左男、幹事板垣寿見子、福田裕子、廣部順子、島田瑞子、監査佐々木理夫の各氏を選んだ。

会員数は約三百三十人、総会は第七回以降毎年開いており、平成十年は十一月七日「ホテルオークラ・霞友会館」に六十名が参会して盛大に行なわれた。母校から小浅梯司校長が出席され母校の近況を話された。懇親会では思い出話に華が咲き、恒例の抽選会で一喜一憂、最後に懐かしい校歌を斉唱して散会した。総会

資料に会と会員の近況、母校の現況などを記載して頒布しており、機関誌は作成していない。

母校とは総会案内を校長に送り、学校の近況等の資料を頂いている。母校同窓会とは直接の交流はないが、平成十一年は谷地頭小学校と統合した「新生青柳小学校」が十周年に当たり、また青柳小学校創立百二十周年を迎える年となり、同窓会として何らかの行事を考えているようなので、実現の場合は希望者を募って参加することを考えている。

(三國比左男 記)



青柳会 於 霞友会館

## 函館東高等学校関東地区青雲同窓会

市中、市高、東高とそれぞれ分かれて開催されていた関東地区同窓会を一本化しようという声が高まり、昭和五十八年八月、新橋第一ホテルでビアパーティを開いたのがきっかけでした。

同窓会本部で発行されている名簿を頼りに、関東地区在住の卒業生に案内状を発送し、各卒業年次の代表が集まって役員会を構成し、昭和六十年五月に関東地区青雲同窓会設立総会を「市が谷会館」で開催しました。

その後、回を重ね平成十年五月三十一日に第十四回総会（はあといん乃木坂）が盛大に行なわれました。現在会員数は約二千名、事務局は中村隆俊會長の戸田中央総合病院に置き、秘書の方々に全面的に協力して頂いております。

年間行事としては総会、納涼会、新年会を定例化し、幹事当番は卒業年次順とし、年令が五十歳になった時に当たるため子育てもほぼ終わり、十八才の高校生に戻った気持ちになって、案内状の発送打ち合せ等、本番までの準備を楽しくやっております。他にゴルフコンペを春と秋に催し、十年十月二十八日には石坂カントリークラブで第十九回を開催、次の二十回大会を楽しみにしています。

また機関誌は、平成二年、四年、六年、九年と四回発行し、会員名簿も発行しております。

定例総会に本部から會長、副會長、幹事長、学校長、恩師、函館市東京事務所長のご出席を頂き、母校の現状、函館市の現況等についてご報告を頂いております。

主な役員は中村會長（市中二期）を中心に、副會長葛西真一他三名、常任理事に近正隆章他九名、監査役牧水浩海他一名、幹事長新山春一の各氏です。

(新山春一 記)

(宝小学校続き)

夕を頂戴していることをお許し頂きたい。在籍会員は勿論高齢者が多く、同窓会本部もいずれは東川小学校同窓会に合併との噂もあるが、その東川も大森に学区再編されるとか、先行き何とも虚しい感もあるが、東京の仲間には最後の一兵になるまで励まし合っていこうと考えている。

(能味寿哉 記)

# 白楊ヶ丘同窓会

## 東京支部

戦前から「在京函中会」という親睦団体があり戦後も綿々と続いていたが母校並びに同窓会から、新制高校の卒業生を含めた組織づくりをとの要請があり、昭和五十二年十一月二十二日の設立総会で「白楊ヶ丘同窓会東京支部」が発足し現在に至っている。

平成十年九月現在の支部会員総数は、約四千五百人、年会費は三千元、総会・親睦大会は昭和五十二年十一月の第一回以来、毎年一回開催し、平成十年度は第二十二回大会を十月二十四日(土)に内幸町のプレスセンターで開催した。総会では懇親パーティの前に会員の講演やコンサート等を行なっているが、ここ数年の参加者は二百人を下回っている。

昭和五十三年に創刊した会報「東京白楊だより」を年一回発行しており、昨年は二十一号でA4版・二十頁建。支部活動の概要、会員の投稿、各期の活動状況等を掲載している。毎号五千五百部を会員と母校、同窓会本部、札幌、宮城、大阪の各支部と西高、東高の同窓会関東支部に送っている。

また平成十年六月よりインターネット上に東京支部のホームページを開設して活動状況や会報、大会のニュース等を掲載している。

この他、会員の親睦を図るため平成五年十一月から有志によるゴルフコンペを企画し、「ポプラ会」と称して春秋二回行なっている。

歴代支部長は斎藤鎮雄、北川有光、村上俊夫、池田和行、篠田作衛の各氏。

現役員は支部長二上達也、副支部長眞船 昭他九名、理事三國比左男他十六名、監事田沼修二他一名である。

「函館西高つじヶ丘同窓会」「函館東高青雲同窓会」と「白楊ヶ丘同窓会」各支部の役員の交流を目的に、各校の総会に役員が相互に出席する他、平成九年十一月から三校のゴルフ愛好者による「函館巴会」を組織し、年一回各校回り持ちでコンペを行なっている。

母校との関係では支部総会・親睦大会には学校長、同窓会本部長に出席を要



東京白楊だより

請して母校の状況や同窓会の動向などを報告して頂いている。また母校の卒業式には支部役員が出席して祝辞を述べ、東京支部の存在を卒業生にPRして入会を

## 白百合学園同窓会

### 東京支部

函館白百合学園同窓会の東京支部は、母校が火災に遭った昭和三十八年五月に火災をきっかけに設立されました。

東京支部の会員は約七百三十名で、今年五月の最終日曜日に総会を開き、今年のはじめはホテル・ニューオータニを予定しております。なお母校では毎年六月の第三日曜日に同窓会の総会を開いており

呼掛けています。さらに本部の総会や札幌、大阪の支部大会にも役員を派遣して相互交流を図っている。

(菅原大作 記)

東京からも役員や幹事が大勢参加し、東京の総会にも校長や諸先生、同窓会本部の会長や役員が出席して下さいます。

支部長は木村由紀子さん三浦恵子さん に続いて平成九年から田代沙智子が担当しており、毎年五十才の方が当番幹事を務めます。機関誌は発行していませんが七年毎に名簿を発行しています。

函館の同窓会本部のほか、東京、関西、仙台、札幌に支部があります。

(田代沙智子 記)

## 東京函商同窓会

歴史は古く「東京函商校友会」として発足したのが昭和七年のことであった。戦後に「東京函商同窓会」として活動を再開、現在会員数約千三百名、(旧制四百名、新制九百名)である。

総会は年一回七月に開いており、平成十年の総会には百二十名が参会した。

会報「臥牛」は昭和十二年八月一日に創刊され、その後一時中断し、昭和三十一年一月一日に復刊第一号を発行、現在に至っている。年一回発行。

母校との関係では、毎年開催される本部総会に役員が出席している。また東京同窓会総会には、母校校長と恩師と同窓会本部役員が出席している。母校の近況や各クラブの活動状況、及び本部、支部同窓会の動き等の情報を会報に掲載して誌上での交流を図っている。

歴代の主な代表者は、第八代会長可児泰雄、九代能味寿哉、十代松岡 修。

現役員は会長 北風順男、副会長 川守田孝平、野館武信、伊藤敏子、幹事長 黒崎 恂である。

(川守田孝平 記)

# 遺愛同窓会

## 東京支部

歴史の古い遺愛の同窓生は、戦前から首都圏に多かつたようですが、同窓会が作られたのは昭和二十三年頃というだけで正確な記録はありません。

最近の会員数は千二百二十名と多く、総会は毎年十二月にクリスマス祝会も兼ねて、青学会館・アイビーホールで開き、昨年は十二月三日で、チャペルでクリスマス礼拝をしてから二部が祝会、三部が総会で、最後にハレルヤコーラスを歌い

ます。何十年たつても全員の合唱は素晴らしいと思います。

会報「遺愛便り」を年一回春に本部で発行。東京支部では「敬老の日」には、七十五才になられた先輩に「お便り」を差し上げ（平成十年は百六十五名）、クリスマスには七十七才を迎えた先輩にブレゼントを（平成十年は百十七名）にお送りしています。

歴代の主な代表者は、久保富美、木村

幸、中村周子、今井フミ、西中村和子、白水恵。

現役員は支部長大竹保子、副支部長工藤千恵、島田瑞子、会計入江節子、川守田礼子、書記前田匡子、平野富美子。

同窓会本部では年一回六月に総会を開き、その際東京支部からも役員が出席、また東京の総会には母校から校長、同窓会長が出席。他に札幌、室蘭、苫小牧、仙台、関西などに支部があり、それぞれ活動しております。

（島田瑞子 記）

## 「函館市西部地区歴史の町並み保存基金」

平成十年八月二十五日の道南会夏期懇親会の席上で、「函館市西部地区町並み保存基金」に会員の寄付をお願いしたところ、次の五十三名から合計五万一千五百円が寄せられ、名簿を添えて基金に贈った。（寄付者氏名・敬称略）

安達昌子、荒木道雄、石野文子、岩城哲郎、石田 端、泉 龍夫、上田 航、小山 光、近江茂樹、加我光徳、葛西真一、川畑行雄、川守田孝平、菊池康三、工藤昭吾、小森良彦、胡麻鶴見世、篠崎哲子、神 れいこ、島田瑞子、須藤珠美、染木トシ、田沼修二、竹内平八郎、丹野康男、出町 卓、寺田耕治、照井陽子、徳田 肇、徳谷 博、島本玲子、中村哲夫、中村隆俊、新山春一、西原林之助、沼崎貞良、根来美和子、能味寿哉、野崎弥寿子、福田裕子、古井勝春、松原竹造、牧水元喜、三國栄顕、三國比左男、三浦幸一、南谷光一、村山正郎、室谷邦雄、山下静一、山田道子、山田克明、矢作勝幸。（以上五十三名）

## 道南会新入会員（夏期懇親会）

小山 光 （柏野小）  
新山 春一 （湯の川小）  
南谷 光一 （常盤小）  
筒井 俊一 （千代田）

# 函館弁コ

## 川守田 孝 平

二年程前の道南会新年総会の席で、亡くなられた和田名誉会長が提唱なされ、「函館弁コを守る会」（仮称）が発足しましたが、具体化しないまま今日に至っております。

たいと思います。

北海道の言葉は大きく分けて「海岸部の言葉」と「内陸部の言葉」の二つになります。函館弁はこの「海岸部の言葉」俗に「浜ことば」と呼ばれるものの中に入ると思います。

昨年夏の会報に相馬先生がお書きになった「母さんの立ち話」を読んで、私の子供時代は、こういう言葉の中で育ったのだなと思ひ、郷愁を感じました。

次に函館弁の単語をいくつか羅列してみますので、誤りがあつたらご指摘頂き、他にご存知の函館弁をどしどしお寄せ願えらば有難いと思います。

だんだん失われていくであろう函館弁を、守るといふ大袈裟なものではなくて、私達共通の故郷を持った者達が、大いに函館弁を語り、忘れた函館弁を思い出し

「あ行」  
あいどくさい 相手にするに足りない  
あきあじ 秋に獲れた鮭

あく	灰
あくど	踵（かかと）
あずましい	ゆつたりする（快い）
あだる	暖をとる（火にあたる）
あだる	中風や食物にあたる
あつたらこと	あんなこと
あつたらもん	あんな奴
あつぺ	反対
あに	長男
あめる	（食物等が）すえる
あやこ	お手玉
あんちゃ	兄さん
あんべわるい	具合が悪い

（以下次号に続く）

# 道南会行事報告

平成十年後半の行事報告です。

## ☆「夏季懇親会」

八月二十二日(土) 午後一時 開会

御茶の水「聚楽」に約八十名が出席。室谷会長挨拶、菊池函館東京事務所長の祝辞のあと、山下名誉会長の音頭で乾杯。懇親会に移ると親しいグループ毎に話に華を咲かせたり、香取神社での松前櫻の花見のビデオを觀賞し、新入会員の紹介があつて三時半過ぎ散会。

## ☆「江戸東京博物館」見学会

九月二十六日(土) 午後一時半

生憎の雨空であつたが両国駅の傍の巨大な「江戸東京博物館」を二十五名の会員が見学した。江戸時代の珍しい展示物や、戦前戦後の東京の変遷の跡が整理されて見ることができた。

## 道南会新年総会

平成十一年の新年総会を次の通り開催します。今年会場を「プレスセンタービル」に移し開催時刻も土曜日の昼間として、高齢の会員や遠隔地にお住まいの会員も参加しやすくしました。

一、二月六日(土) 午後一時開会

二、場所 プレスセンタービル

三、恒例の挨拶、報告等その他、全員に賞品の当たる福引もあります。

なお同封の返信葉書の投函をお忘れなく。

見学のあと最上階にある江戸時代から名の通つた「八百善」でビール等を飲みながら雨に煙る下町を眺めて散会。

## ☆「松戸・戸定邸見学会」

十月二十八日(水) 午後一時半

大河ドラマで紹介された、徳川慶喜の異腹の弟、徳川昭武が帰国後に居住していた松戸にある水戸藩「戸定別邸」を訪ねた。幕末にパリ博覧会に派遣され、引き続き留学して維新後に帰国した昭武が住んだ所である。広い邸宅は良く手入れされて残つており、屋敷を取り囲んで洋式を加味した日本庭園がある。邸内の歴史館には昭武・慶喜の愛用した貴重な遺品や写真が展示されていた。三十名の参加者は、庭園の一隅で、記念写真を撮り、三時半過ぎ別邸を辞した。

## 郷土訪問旅行

道南会では「五稜郭祭り」見物と松前城での観桜会を企画しております。奮つてご参加下さい。

一、五月十五日(土)〜十七日(月)

(二泊三日)

二、費用 航空運賃・ホテル代含め

四万二千円程度

三、備考 返信用葉書に「参加」或いは「未定」欄に印を付けた

方に改めて詳しい内容を、ご連絡します。



松戸 戸定邸と庭園

## ☆「芭蕉と煎餅の里・草加を訪ねる」

十一月十四日(土) 午後一時半

二十五名の会員が草加駅に集まり、草加在住の渡辺丞二会員ご夫妻のご案内で、草加歴史資料館を見学の後、市内を散策、「草加煎餅発祥の碑」を眺めてから「芭蕉公園」で小休止。旅姿の芭蕉の銅像前で記念写真を撮つて、旧日光街道の松並木を歩き、往時を復元した見事な太鼓橋を渡つた。続いてタクシーで草加煎餅を製造販売している丸福一草本店に向い、機械化された煎餅の焼き上げを見てから、出来たての熱い煎餅を試食し、四時半散会。



芭蕉旅姿銅像前の会員

## ☆「歳末築地市場視察」

十二月十九日(土) 午前九時

築地本願寺前に集まつた会員三十名は年の瀬を控えて賑わう市場に入る。業者のセリはすでに終わり、魚屋さんや食材を仕入れる飲食店関係の人、新鮮な魚を探す我々のような素人が、御の店を覗いて品定めに余念がない。郷里の懐かしい魚介類に思わず財布の紐を緩めて正月用品を仕入れ、何か得をした気分が自由解散となつた。

この後、有志会員はグルメに評判の場外の食堂で早い昼食を楽しんだ。